

ヒマラヤにおける2つの羊毛敷物 チベット絨毯とネパールのラリの生産と流通

阪南大学国際観光学部
渡辺和之

1 ヒマラヤ南北の羊毛敷物

ネパールの首都、カトマンズを訪れると、チベットからの難民が製作しているチベット絨毯じゅうたんを売る店が多くあります。チベット絨毯は、欧米にも輸出され、1990年代には国の基幹産業の1つになりました。現在では、その輸出量は少なくなりましたが、ボウダナートと呼ばれるチベット仏教の寺院の周囲にいくと、チベット絨毯を売る店や羊毛の加工をする工場がまだたくさんあります。

ただ、素材という点でみると、チベット絨毯に使用される羊毛はネパール国産のものではありません。もともとネパールをはじめ、ヒマラヤ山脈の南面地域の在来種である羊はバルワール種 (Baruwal) と呼ばれる羊なのです [Epstein 1977]。この羊は、ヒマラヤ山脈を群れで季節移動しながら飼養されてきました [渡辺 2009: 99-100]。その半面、羊毛としては粗く、編物にも、絨毯にも不向きでした。一方で、ヒマラヤ南面原産の羊であるバルワール種の羊毛は、洗って縮むとフェルトになる特性を持っています [Dunsmore 1993: 142]。この特徴を生かしてフェルトの織物に加工したのがラリ (rāḍi) です。

発表では、チベット絨毯とラリというヒマラヤの南北を代表する羊毛敷物に注目し、その素材をどこから調達し、誰の手によってどのように加工され、どこに流通していくのかを明らかにします。また、生産者が抱える問題や課題についても考察します。

2 ネパールのチベット絨毯

2.1 チャルサのチベット絨毯

東ネパールのソルクンブー郡の郡庁所在地であるサレリから山道を登ること2時間でチャルサの村につきます(図1)。2011年夏、この村の絨毯工場を訪れる機会に恵まれました。だが、現地を訪れてみると、ずいぶん前に工場を閉鎖したことがわかりました。なかには入れませんでした。窓から昔使用していた高機の木枠が見えました。

建物を管理している住民によると、工場は1995年から1996年頃に閉鎖されたそうです。工場は難民援助の目的で建てられたといえます。スイス政府はチベット動乱のあった1959年以降、難民援助、絨毯工場の設置、チーズ工場の設置、水力発電所の設置、自動車道路の建設など、ソルクンブー郡の開発に取り組んできました。

住民によると、絨毯工場の機械や染料もすべてスイスから持ってきたものでした。羊毛もカトマンズから運んできたものを使っていました。また、工場できあがった製品も、カトマンズに直送し、ドイツをはじめとする海外に輸出していたそうです。

チャルサでは、自分の家で絨毯を織って生計を立てる人もいます。今では少なくなりましたが、現在も家で絨毯を織る人がいました。そのうちの1人が織機を見せてくれました。木枠の付いた足踏み式の織機でした(写真1)。この織機のことを現地名でティジャン (tijyang) といいます。ペダルを踏むと、2つ

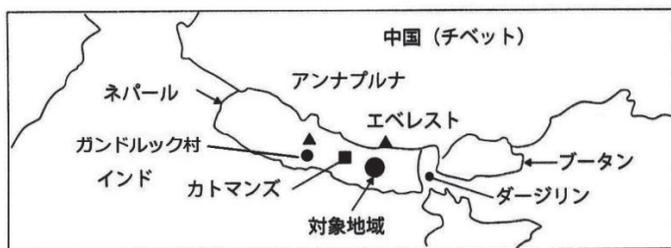
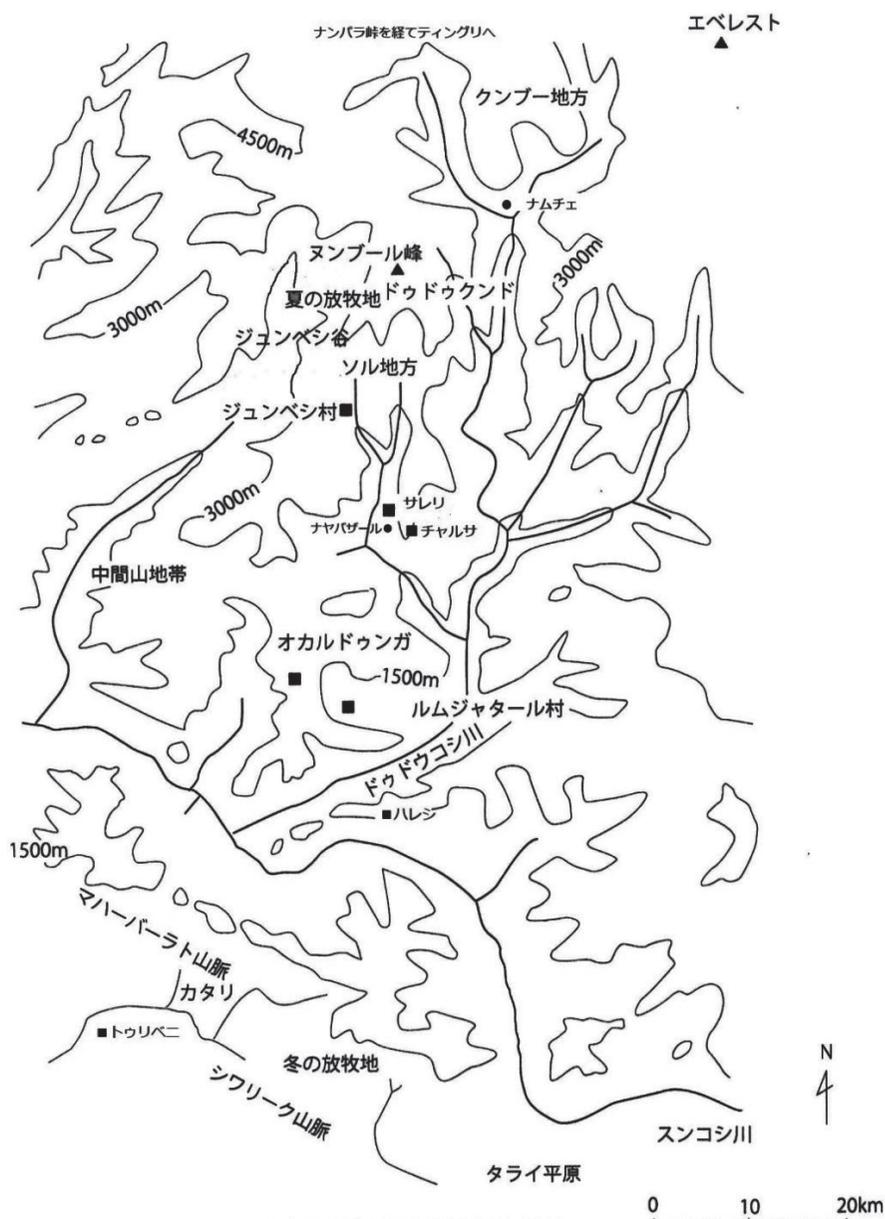


図1 調査対象地域 (筆者作図)



写真1 家で織るチベット難民の機 (2011年8月25日筆者撮影)

の^{まうこう}綜統が交互に上下し、開口部ができる仕組みになっています。

この方によると、家で織ったものは近くのナヤバザールの定期市に売り、工場で織ったものはカトマンズへ出荷していました。チャルサではもう絨毯を作っていないそうです。家で織っている人も彼の奥さんを含め、1-2人になってしまいました。

工場が閉鎖されたのは、地代が高くなったためだそうです。チャルサに住む人々は、自分の家を建てた人も、工場の土地に住んでいたため、地代を払う必要がありました。この地代の上昇を契機に、多くの人々がカトマンズに移住したそうです。

2.2 カトマンズの羊毛市場

つぎにカトマンズで製造されるチベット絨毯がどのような素材を用い、どのような人々の手を経て製造され、どこに流通するのか、2014年にカトマンズのボウダナート寺院の周囲で関係者に聞き取りをしました。

まず、原毛販売店 (low wool shop) では、輸入した原毛を売っています。現在、絨毯やセーターに用いられる羊毛は、おもにチベット産とニュージーランド産です。輸入量としては、おおよそチベット産75% (年間1200トン) に対し、ニュージーランド産25% (年間400トン) です。原毛の価格は、チベット産が1kgあたり300ルピーであるのに対し、ニュージーランド産が525ルピーで、ニュージーランド産の方が高いです (1ルピーは2014年には約1.2円)。ニュージーランド産の羊毛は細いものが多く、セーターや編物に向いています。絨毯に必要な太さは36-38マイクロンであるのに対し、編物には32マイクロン、セーターには28-30マイクロンと、編物やセーターには細い羊毛が必要となります。

つぎに原毛を糸に加工します。この工程に関わる業者は、洗浄 (washing)、梳毛 (carding)、糸紡ぎ (spinning)、染色 (dyeing) などの作業を経て、羊毛の糸を絨毯工場や

セーター工場などの加工業者に売ります。

絨毯工場は、購入した糸を絨毯に加工し、販売します。海外に輸出するだけの所もあれば、国内で観光客向けに販売している店もあります。おもな輸出先は、EUやアメリカなどで、中国向けの輸出も近年では増えているそうです。EUに輸出するためには、EUの輸入規定に従う必要があります、それらのことについても経営者はよく知っていました。

絨毯工場や羊毛関連の仕事に従事する民族は、1990年代のネパールではチベット人やシェルパなどチベット系の民族が多いイメージでした。だが、実際に調べてみると、絨毯工場を経営していたのは、タマン、ネワールなどチベット=ビルマ語系の民族の人でした。梳毛や糸紡ぎなどの分野ではバフン、チェトリやネワールなどの民族も工場を経営しており、チベット系の民族の経営者に会うことができませんでした。その理由を尋ねたところ、「みな海外に移住してしまった」との答えが返ってきました。

2.3 絨毯産業の低迷

1990年代の中頃は、絨毯産業が低迷した時期でした。その背景には、ドイツをはじめとするヨーロッパ諸国で、チベット絨毯の不買運動があったからと言われています。当時の絨毯工場では、就学年齢の子供が働いており、児童労働が問題で不買運動に発展しました。

ただ、当時、絨毯工場は子連れの女性が住み込みで働ける、ネパールでは数少ない場所の1つでした。もちろん、当時の絨毯工場は労働条件の悪さや低賃金などの問題がありました。だが、社会的弱者の生活手段になっていた側面もありました。

また、絨毯業界の関係者に聞くと、児童労働による不買運動よりも、リサイクル・ウールの問題の方がより深刻だったといいます。ネパール中央絨毯産業協会の方によると、かつて、ネパールで絨毯を織る際に出たくず糸

をインドに送り、もう一度糸に紡ぎなおしていました。それをネパールへ輸入し、絨毯に仕立て、インド・ネパール・カーペットとして売り出していたのです。ところが、1994年にリサイクル・ウールという混ぜ物をしてということが発覚し、業界の人々の品質に関する信頼を一気に失ったそうです。不買運動は業界の外の人たちからの声でしたが、リサイクル・ウールの問題は業界の内部からの批判だっただけに、販売量の低下に直結することになったのです。

3 ヒマラヤ南面産の羊と羊毛敷物ラリ

つぎに、ネパールをはじめとするヒマラヤ南面地域で飼養されるバルワール種の羊を用いたラリを見ていきましょう。ラリは、編物にも絨毯にも不向きな粗い羊毛を利用した、フェルトの織物です。

3.1 ルムジャタール村

ルムジャタール村(標高1300m)はエベレストの南、約100kmに位置します。行政区分では、オカルドウンガ郡に属します。この村は郡内でも羊飼いの村として知られています。羊を飼っているのは、グルンを中心とするチベット=ビルマ語系の民族集団の人たちです。村では羊飼いたちの生産する羊毛を利用し、ラリを織っています。ラリを織るのは、女性の仕事です。女性たちは農業の副業として、収穫が終わる12月中旬から翌年の3月を中心に、ラリを織る仕事をしています。

3.2 羊毛の生産と移牧

ラリの原料となる羊毛は、村の羊飼いが飼う羊のものを利用します。ルムジャタール村の羊飼いは、移牧いぼくといって、定住村を持ちつつ、妻子を村に残し、基本的に男たちばかりで、年間を通じて移動しながら羊を放牧しています。その移動は夏にはヒマラヤ山脈の高山草地、冬にはタライ平原の近くにまでおよ



写真2 羊毛の毛刈り (2014年3月3日筆者撮影)

びます [渡辺 2009: 59-72]。

羊飼いたちが羊毛を刈るのは年2回、夏の高山草地を下りた9月と冬を越した2月です (写真2)。刈りとった羊毛は村に送ります。かつては、山道を歩いて村まで運びましたが、2006年頃までには自動車道路が開通し、バスの荷台に載せて運べるようになりました。

3.3 ラリの生産過程

つぎにラリの生産過程について述べます [詳しくは、渡辺 2004, 2009: 228-293 を参照]。村に到着した羊毛は冷水で洗い、続いて羊毛を梳いて柔らかくします。コレソという針のついた2枚の梳き具を使い、その間に羊毛をはさんで梳きこんでいきます。こうして、綿菓子のようになめらかになった羊毛を、糸車で紡いで糸にします。

できあがった糸は織機にかけ、1枚の羊毛の布に加工します。織機はいわゆる腰機で、織機的一方は壁に吊して固定し、もう一方は

ベルトで織り手の腰にあてて固定するものです (写真3)。織目は、経糸と緯糸が交互に交差し、いわゆる平織りの状態になります。ずっと織っていくと、最後には輪状といって、筒のようにつながった一枚の布に織りあがります。最後まで織らず、経糸を手のひら1つ分だけ残しておきます。この部分は、のちに輪状となった部分を切って広げると、布の上下を飾るフリルになります。

織りあがった羊毛の布をいくつか縫いあわせ、数種類の異なるサイズのラリができます。2枚以上のラリをつなぎ合わせる場合、模様が複数の布にまたがります。模様の種類は、色の異なる天然色の羊毛の糸を組み合わせで作ります。

縫い合わせたラリはお湯に浸し、揉み込んで縮ませます。ラリを縮ませる時には、大きな鍋に沸かしたお湯に浸します。つぎに鍋から取り出して竹で編んだマットの上で1時間から2時間かけて足で揉み込みます。この洗って揉み込む作業を3回繰り返すと、



写真3 腰機でラリを織る。織り上がると輪状になる（1997年3月筆者撮影）

縮んでフェルトになります。最後に輪状の部分を切って広げると、ラリが完成します。

ちなみに、一般的なフェルトの作り方は、糸にする前の羊毛をむしろなどの上に広げ、それを湿らせ、長時間ローリングすることで、縮ませるものです。このやり方は、モンゴルから中央アジアを経てヨーロッパまで分布しています [ジョンソン 1999: 4-7]。この点で一度羊毛の糸を作り、織ってからお湯をかけて縮ませるラリの方法は、世界的にみて、きわめて珍しいフェルトの作り方なのです。

3.4 ラリの利用と流通

できあがったラリは自家用にも使います。なかでも、グムラーリは羊飼いたちが寝具や防寒具として多目的に使うものです。防空頭巾のように上部と後部だけ縫い合わされたもので、頭からすっぽり被ります。また、羊飼いたちのなかには、羊毛の袖なしのチョッキ（アバラ）や袖付きのジャケット（ルクニ）を、防寒具として着る人もいます¹⁾。どちらもラ

リを縫い合わせて作ります。

こうした自家用に使われる羊毛は、羊毛全体のごくわずかです。残りの大半の羊毛は、敷物に加工し、仲買人に売って現金収入にします。仲買人は町で開かれる定期市や寺院の祭礼に開かれる大市に出店します。そこからラリは北インドやカトマンズにも流通していきます。ラリは、ローカルな羊毛を利用した敷物ですが、都市にまで流通する商品なのです。

3.5 ラリのイノベーション

ラリはローカルから都市に商品として流通していますが、都市を越えて、国際市場に流通することは可能なのでしょうか。以下では観光化された地域の事例をみましょう。対象とするのは、アンナプルナ南麓にあるガンドルック村です。アンナプルナ山麓は国際的な観光地です。かつて1997年にガンドルック村を訪れた際には、ポカラの街からバスで3時間、さらに徒歩で6時間行かねばなりま

せんでした。現在では村まで自動車道路が開通しています。

羊の種類はルムジャタル村同様、在来種であるバルワール種でした。ここでもルムジャタル村のラリに相当するフェルトの敷物をグルンの人たちが織っています [Pignède 1966: 97-100, 1993: 86-90]。ガンドルック村では、これらの羊毛の敷物はボクーやカンマルと呼んでいます。

羊毛の加工技術に関して大きな変化があったのは、在来の腰機に加え、高機が導入されたことです。高機は1990年代にACAPと呼ばれる組織によって導入されたそうです。ACAPとは、アンナプルナ保全地域プロジェクト (Annapurna Conservation Area Project) の略称で、1986年に自然保護を目的に設立された機関です。ACAPは、住民参加による森林管理という考え方から、環境教育や女性の生活向上計画にも積極的に取り組んでいます [Stevens 1997: 249-258]。

村のある女性は、この高機を用い、村で生

産した羊毛を絨毯に加工し、観光客向けに売っています。また、絨毯はポカラにある観光客向けのみやげ物屋にも出荷しています。ここからわかるように、ごわごわとした粗いバルワール種の羊毛でも、新たな技術を導入すれば、絨毯になるのです。

しかし、高機で絨毯を織る女性によると、あまり売れないのだそうです。というのも、ポカラのみやげ物屋でチベット絨毯と並べて売られると、どうしても村の絨毯は見劣りしてしまいます。また、村で観光客向けに絨毯を売っていても、トレッキングの観光客は徒歩で移動するので、荷物になります。さらに、絨毯に加工してしまうと、値段が高すぎて普通の村人には買えません。それゆえ、ガンドルック村では、絨毯を作って売っていても、平行して在来のボクーやカンマルも作っています (写真4)。村人にとって、ラリやカンマルはちょっと手を伸ばせば買える贅沢品なのです。

カトマンズでは、在来のラリを改良する動



写真4 ラリに相当するボクー (左) とバルワール種の羊毛で織った絨毯 (右) (1997年11月筆者撮影)

きもあります。カトマンズではパキと呼ばれる敷物を作っている人達があります。パキの作り方はいくつかの点を除くと、ラリの作り方とまったく同じです。技術的に異なる点は、化学染料で染色した羊毛の糸を用いることと、洗って縮める作業に機械を用いる点です。染色の色合いは日本人から見るとかなりけばけばしいものです（写真5）。しかし、カトマンズに住むネパール人の間では、こういう色合いが斬新でよいのだといいます。

4 2つの羊毛敷物

以上、ヒマラヤの南北を代表する羊毛敷物

をみてきました。最後に、素材に注目しながら、生産から流通に至るネットワークを比較し、生産者が抱える問題点や課題について考察してみましょう。

まず、チベット絨毯は、絨毯工場で生産されるものに関する限り、もともと難民対策として導入されたものです。素材である原料の羊毛は、チベット産だけでなく、ニュージーランド産のものや中国産のものも輸入して用いています。染料も化学染料を用いており、織機である高機や織りの技術も、スイス人による技術協力で導入されたもので、完成した製品も欧米に輸出されています。また、家で織る絨毯の場合は、もともとチベット系の民



写真5 完成したパキ（中央）、天然色のラリ（右）も作っている（2011年8月17日筆者撮影）

族が使っていた織機を用いていましたが、その素材となる原料の羊毛は、チャルサで購入した輸入したものをを用いています。

これに対し、ラリの場合、素材となる原料は、ヒマラヤ南面原産のバルワール種の羊毛を用いています。村の羊飼いが移牧によって得る羊毛を、村の女性が農閑期に副業として織るものです。近年では、粗いバルワールの羊毛を使った絨毯や化学染料を用いたパキも作られるようになりましたが、基本的には地元で生産した羊毛を用い、天然色を用いて模様を作っています。また、そこで生産された敷物は、チベット絨毯のように世界市場にまでは届きませんが、仲買人や定期市を経て、都市の市場にまで流通します。

このように世界市場向けに産業としての規模が大きくなると、どうしても原料も地元で古くから用いていた素材から乖離していくことがわかります。

では、ラリはチベット絨毯のように、世界市場をめざすべきなのでしょう。メリノ羊のような良質な羊毛が取れる羊の品種を導入し、羊毛の品質を向上するには、その羊に合う放牧条件が必要です。というのも、改良品種の羊は、ネパールのような山地で、在来種のように、森林の下草を食べる過酷な環境に耐えられないかもしれないからです。

また、ニュージーランド産の羊毛を利用し、ラリを作ることはまだ成功していません。チベット絨毯の工場を営むルムジャタル村出身者が試みたところ、結果的にはフェルトにならず、「やはりラリは村の羊毛でないと駄目なのだ」となりました。将来的に技術的な改良が進めば、外国産の羊毛でラリを作ることにも可能になるのかもしれませんが、ただ、その場合も、国際市場に出荷すれば、チベット絨毯のように国際市場の需要や市場の動向に大きく左右されるようになります。また、観光客向けに売っても、アンナプルナ南麓の絨毯のようにチベット絨毯と比べると見劣りするかもしれません。

ラリは移牧の環境に耐えられるバルワール種という在来種の羊の特性を生かして生み出された文化なのです。ラリは農村では土間に敷くものであり、藁わらのゴザを普段敷いていた人が客人をもてなす時に差し出すものでした。いわば、ラリを知る人にとってみれば、ちょっと贅沢をすれば誰でも買える高級品として認識されていることが重要なのです。

無論、大量生産による安価な工業製品はネパール社会にもどんどん押し寄せています。また、移牧によって羊毛を生産する羊飼いが減少することで、原料となる羊毛そのものが今後、かなり入手困難になってくることも予想できます。チベット絨毯やラリをめぐる環境も、これから大きな転換点を迎えることになるでしょう。それゆえ、今後もその行方を見守っていきたいと思います。

<注>

1) Dunsmore は羊毛の袖なしのジャケットをルクニと書いています [Dunsmore 1993: 140]。しかし、ルムジャタル村では、袖なしのチョッキがアバラで、袖付きのフェルトのジャケットをルクニと呼んでいます。筆者は『染織α』に掲載した原稿で、Dunsmore にならい、間違っアバラとルクニを逆に書いてしまいました [渡辺 2004: 67]。記してお詫びいたします。

<参考文献>

- ジョンソン、ジョリー 1999『フェルトメイキング・ウールマジック』青幻舎。
 渡辺和之 2004「粗い羊毛とフェルトのラグ」『染織α』272: 64-67。
 渡辺和之 2009『羊飼いの民族誌——ネパール移牧社会における資源利用と社会関係』明石書店。

Dunsmore, Susi 1993 *Nepalese Textiles*. London: British Museum Press.

Epstein, Hellmut 1977 *Domestic Animal of Nepal*. New York and London: Holmes & Meier Publishers.

Fürer-Haimendorf, Christoph Von 1975 *Himalayan Traders*. London: John Murray.

Pignède, Bernard 1966 *Les Gurungs: une population himalayenne du Nepal*. The Hague and Paris: Mouton & Co. et Ecole Pratique des Hautes Etude.

Pignède, Bernard 1993 *The Gurungs*. Translated by Sarah Harrison and Alan Macfarlane, Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.

Stevens, Stan 1997 Annapurna Conservation Area: Empowerment, Conservation, and Development in Nepal. In S. Stevens ed. *Conservation through Cultural Survival*. Washington D.C.: Island Press, pp. 237-261.